

# デジタル通信革命の舞台裏

## 内海善雄 前I-T-U事務総局長

本紙22日付で案内の通り、きょうから17回にわたり、内海善雄氏の経験を踏まえ日本が歩んできた電気通信発展の道と、将来のテレコム産業発展に対する日本の役割などを紹介する。

「内海先生は、日本人の欠点を強調するけれど、日本人には、いっぱい良いところがある。そこをどう生かすかがポイントではないですか？」



私は、WHO(世界保健機関)の事務局長だった中嶋博士に次いで日本人とし

8年間の事務総局長

私、WHO(世界保健

職して34年間、主として電

力月と宣告され、一刻も早

会社を辞して、1年遅れ

4月1日、狸穴にあった

思

は百戦危うからずだ」。

# 井戸を掘って水脈に通じる

## 温かい郵政一家

「いや、日本人が陥りやすい欠点を意識しなかったために、自分は、外国人との交渉では失敗した。まあ、I-T-U(国際電気通信連合)の事務総局長の職に就いてきた。敵を知り、己を知れば百戦危うからずだ」。

2号教室でのやり取りである。

月、早稲田大学14号館40

私、WHO(世界保健

職して34年間、主として電

力月と宣告され、一刻も早

会社を辞して、1年遅れ

4月1日、狸穴にあった

思

まれば国際な一本道ではなかった。経験をしたの1965年、東京大学法学部を卒業して、まず東芝高に話したのは、某省の秘書課長であった。みた。「一度就職した者には、敷居が高いぞ」と、居丈高に話したのは、某省の秘書課長であった。おおいに慰留された。最後まで迷いながらも、結局、郵政に転職することになった。その後、どんな職務や困難なことに直面してもこの気持ちを持つことができた。転職を経験しなければ得られなかったものだったと思う。

「自分は、世の中に役に立つことをしているのだ。井戸を掘って水脈まで通じるのだ」と、いつも前向きになれた。

「いや、日本人が陥りやすい欠点を意識しなかったために、自分は、外国人との交渉では失敗した。まあ、I-T-U(国際電気通信連合)の事務総局長の職に就いてきた。敵を知り、己を知れば百戦危うからずだ」。

「温かい郵政一家」で、後進の若い人に、少しでもそれを伝えるのが自分の任務である。早稲田大学で、全学部の希望者を対象に毎年秋季にこの講座を開いている。1966年、郵政省に奉職して34年間、主として電

力月と宣告され、一刻も早

会社を辞して、1年遅れ

4月1日、狸穴にあった

思